

# 筑波大学

## モニュメント

博士(学術)

幡谷祐一氏 寄贈

平成26年10月7日



題名：「旅へ」  
制作：筑波大学芸術系教授 柴田良貴 日展会員  
材質：本体/ブロンズ、台座/白御影石  
サイズ：h.185×w.55×d.65cm  
出品展覧会：第39回日展(2007年)

「旅へ」「夜の幕をひらく」の作品について

「旅へ」の人物像は、その姿の通り、  
たった一人での旅立ちを表わしています。  
充分な準備が整ったのか、多少不安は残りますが、決意を込めて、  
衣の裾を少し持ち上げ、背にマントを真っすくに纏い、  
前方をしっかりと見据えながら一歩前へ踏み出したところです。  
— 大学から社会へ —  
人生の大きな転機の旅を、キャンパス内にあるこの像を見て  
共感していただければ幸いです。

事物の深層が見えるのは、夜のじじま、静寂の時が多いように思われます。  
「夜の幕をひらく」の女性像は、幕と一体となって踊るように昼を閉じ、  
そして夜の帳をひらいています。

柴田良貴



題名：「夜の幕をひらく」  
制作：筑波大学芸術系教授 柴田良貴 日展会員  
材質：ブロンズ、サイズ：h.184×w.132×d.65cm  
出品展覧会：第41回日展

作品、漢詩銘板の設置場所



★作品「旅へ」 ■漢詩「忘食」の銘板 ●作品「夜の幕をひらく」

漢詩揮毫：筑波大学芸術系 教授 中村伸夫  
写真撮影：筑波大学 鷺野谷秀夫  
パンフレットデザイン：筑波大学芸術系 准教授 田中佐代子



忘食 ぼうしよく 作 幡谷祐一  
白面書生學筑波 はくめんのしょせいづくばにまなぶ  
發憤忘食紙筆耕 はつぶんぼうしよくしひつたがやす  
桃李滿門邦家豊 とうりもんにみちてほうかゆたかにす  
紫峰名聲四海奔 しほうめいせいしかいをかける

## 博士(学術) 幡谷祐一氏 経歴

大正 12 年 茨城県東茨城郡小川町(現小美玉市)で誕生  
昭和 16 年 茨城県立土浦中学校(現土浦第一高等学校)卒業  
昭和 18 年 学徒出陣により出征  
昭和 19 年 仙台陸軍飛行学校卒業  
昭和 21 年 日本大学法文学部法律科卒業  
昭和 41 年 茨城トヨベツ(株)代表取締役社長就任  
昭和 55 年 茨城県公安委員会委員(委員長等9年)  
昭和 56 年 トヨタ部品茨城共販(株)代表取締役社長就任  
昭和 62 年 茨城県信用組合理事長就任  
平成 6 年 「茨城県特別功績章」受章  
平成 9 年 茨城県中小企業団体中央会会長就任  
平成 19 年 筑波大学生命環境科学研究科博士課程入学  
平成 20 年 「紺綬褒章」(平成 20 年～平成 25 年に 5 回)受章  
「旭日中綬章」受章  
平成 22 年 筑波大学生命環境科学研究科博士課程修了  
全国最高齢で博士(学術)を取得  
平成 24 年 茨城県信用組合会長就任

## モニュメント設置の経緯と趣旨

筑波大学生命環境系長 白岩善博

### 経緯

東日本大震災を受けて全学的に耐震改修工事が実施される中、生命環境エリア(第 2 エリア)における、特に身障者の安全確保・避難路の整備、合わせて当該中庭にベンチなどの設置を行い、「生命環境エリアでの教職員・学生の憩いの場」とすることを構想しました。さらに、当該中庭を学問の府にふさわしいシンボリックなものとするために、風景の核となるようなモニュメントを設置し、それを「筑波大学のアカデミックシンボル」とする企画を立案しました(平成 24 年秋)。

以上の経緯の中で、本モニュメントの設置にあたって、大学本部では清水一彦副学長が中心となって調整された結果、学長のご了承をいただくこととなりました。そこで、生命環境系長から杉浦則夫生命産業科学専攻長を介し、本学生命環境科学研究科生命産業科学専攻に 83 歳で入学し、86 歳でバイオディーゼルの研究で博士(学術)を取得された幡谷祐一博士にご支援を依頼したところ、ご寄付のご快諾を得ることとなり、本モニュメントの設置が具体化する運びとなりました。

モニュメントには、博士の紹介や学問に対する思いの一端を刻して戴きます。ご高齢でありながら一回も休まずに水戸から筑波大学まで通い続け、最前列で講義を受け、バイオディーゼルの研究に関する学位研究を遂行し、その成果として学会賞を取得する業績を挙げたことはまさに快挙です。その博士の後輩への激励と期待の一端を込めた漢詩を銘板に刻し、幡谷博士からのメッセージといたします。

モニュメント製作については、玉川信一芸術系長にご相談し、柴田良貴芸術専門学群長のご協力を得ることとなりました。平成 25 年秋に、幡谷博士ご夫妻が、大学会館で開催された柴田学群長の個展を見に来られ、数ある中から「旅へ」をお選びになり、作品と共に記念写真を撮られました。その写真は、現在、「けんしん」幡谷会長執務室に掲げられております。その際、朝永記念館をもご見学にいただきましたが、文学少女であったという奥様の博識ぶりには一同感激したことを思い出します。しかし、誠に残念ながら、平成 26 年 1 月に奥様が急逝され、モニュメント除幕式にご出席できないことは無念の極みです。

尚、耐震改修工事の関係から、モニュメント設置場所を総合研究棟 A 棟前庭に移すこととし、平成 26 年 10 月 7 日に除幕式を挙げる運びとなりました。

### モニュメント設置の趣旨

長い歴史を有するドイツの大学においては、博士の学位取得者に皆で祝意を表する恒例の行事があります。例えば、ゲッチンゲン大学においては、市庁舎の噴水に設置されたガチョウ売りの少女(Gänselesel)の像にキスをする、マインツ大学では馬の像に乗るなどです。このような記念行事は、大学関係者、市民、家族、友人等が学位取得者に祝意と尊敬の意を表し、合わせて学位取得者本人に対して、「博士として生きる」ことに対する強い自覚を促すものとなっており、多くの大学にそれぞれのやり方が受け継がれています。

このたび設置するモニュメントは、筑波大学における博士取得者に対して、その学位取得を記念すると共に、人類が築いてきた営々たる学問の歴史とその府で授与された「博士として生きる」ことの重みを自ら感じ取るためのアカデミックシンボルとなるものです。まさに、「旅へ」はそれを象徴するものとなるでしょう。

学位取得者が教員、同僚学生、家族等と共に記念撮影を行い、また留学生を介して世界中に筑波大学のアカデミックシンボルが広まると共に、いつまでも母校に対する思いを持ち続けることにも大きく貢献するものと期待されます。

また、傍らに設置する銘板に刻す幡谷博士ご自作の漢詩「忘食」は、「食も忘れて事に没頭する」博士ご自身の体験に基づく様を表現しており、若き研究者や大学院生に対する強いメッセージとなるでしょう。

勿論、本モニュメントは、日々の研究教育活動を行う者とそれを支える教職員・学生全員に心のゆとりを与え、日々の生活の精神的支えともなるものです。さらに、学外からの訪問者にとっては、筑波大学におけるシンボルの一つとして、キャンパスのランドマークともなると共に、大学や学問の歴史の再認識と筑波大学の学問に対する基本的考えを感じ取るものになるとの期待を込めて設置するものです。

### 漢詩「忘食」の訳

若い学生諸君が筑波大学に学んでいる。

皆さんは心を奮い立たせて、

勉強に夢中になって励んでいる。

筑波大学は、沢山の卒業生が

日本のために活躍している。

筑波大学の名声は世界にひろがっている。